

創刊号

発行日 平成14年元旦

曹洞宗 慈雲山松田院龍源寺

# 山雲水月

発行責任者 龍源寺住職 渡辺啓司

平成14年

龍源寺 年間予定表

- 1/1 年頭祈禱
  - 1/3~4 年始挨拶
  - 2/3 ※節分会
  - 3/18~24 春彼岸
  - 3/23 蚕影山倒祭
  - 4/8 ※花祭り
  - 4月末 施食会法要
  - 7/12~16 県外檀家棚経
  - 8月上旬 ※子供禪の集い 8/13~16 お盆
  - 9/20~26 秋彼岸
  - 12/8 ※成道会
  - 12/31 除夜祭
- ※は仁叟寺にて修行予定

## 平成14年 住職年頭挨拶

### 謹賀新年

#### ■母は老いて■

たわむれに 母を背負いて その余り 軽きに泣き 三歩あゆまず (石川啄木)

知らなかった…。こんなに母が軽いなんて…。息子は、やがて成人となり 体つきも大きくなってきます。しかし、母に対する想いは、子供の時のままです。

背負って始めて分かりました。重くて歩けないではありません。息子は成長していく反面、母は老いて小さくなっていったのです。



そこには、母の苦勞がしみじみと伝わってきます。あまりにも遅すぎた実感に、感極まって歩けないのです。

「生きているうちに親孝行。」生きていてくれるだけで親はありがたいものです。親に感謝。生んでくれて、育ててくれた親だもの。お正月、親の手を握って、「長生きしてね！ありがとう！」と恥ずかしながら言ってみよう。

親が亡くなっている人は仏壇とお墓で、「おめでとう！今年も家族一同、健康で頑張るよ。」とご挨拶を。

本年5月に当寺に於いて、弟子・長男龍道の晋山結制式、次男俊司の首座法戦式の一世一代の儀式を併せて行います。檀信徒の皆様の格段のご支援・ご協力をお願いいたします。

### 目次：

新年挨拶

瑞世

仁叟寺通信 1

探索 - 1 -

梅花講

連絡先

編集後記

## 1 年回法要一覧表

1	一周忌	平成十三年	二十三回忌	昭和五十五年
2	三回忌	平成十二年	二十七回忌	昭和五十一年
3	七回忌	平成八年	三十三回忌	昭和四十五年
4	十三回忌	平成二年	五十回忌	昭和二十八年
4	十七回忌	昭和六十一年	百回忌	明治三十六年

すいせ

## 弟子龍道 兩本山へ瑞世拝登



だいそどう  
大本山總持寺大祖堂  
において瑞世の拝登を  
行う弟子・龍道(中央)

去る12/12に福井県永平寺で、12/14には、神奈川県總持寺の兩大本山において、弟子の長男・龍道の瑞世の儀が厳肅に営まれました。

瑞世とは、曹洞宗の兩大本山に上り高祖承陽大師(道元禪師)、太祖常済大師(瑩山禪師)に礼拝し一夜住職の儀式を修行することを言います。これにより、今までは黒いお袈裟でしたが、色の付いたお袈裟を着用することが許されます。曹洞宗が開かれた鎌倉時

代より多少形式は変わりますが、脈々と伝わる宗門の大切な儀礼であります。

また、瑞世拝登の際には、龍道のどうあんご同安居(修行時代の同期)も駆け付けて下さいました。永平寺では福島県郡山市の勝音寺・瀧澤勝俊師、總持寺では同県いわき市の龍門寺・光英覚法師、新潟県小出町の林泉庵・尾山晋祐師です。それぞれにこの場を借り、厚く御礼を申し上げます。

## 弟子俊司 總持寺修行中

弟子の次男・俊司が大本山總持寺で2年目の修行に励んでいます。俊司は駒澤大学仏教学部禅学科を休学しての、本山での修行生活でございます。今年中には同大学への復学を考えているようです。

俊司は現在、總持寺の受付—  
しかりょう ちやじゅう  
知客寮という部署にいて、茶頭兼  
たいほうかんせつぎやく  
待鳳館接客という配役を頂いておりま

す。この寮では主に本山に来られる御寺院さんや檀信徒の皆様をはじめとする信者の方々の受付や接待を司っております。文字通り大本山總持寺の“顔”といったところではないでしょうか。

もしも、横浜方面へ行く機会がありましたら、是非、大本山總持寺まで足を運んでみてください。



總持寺三松閣前にて



ふじきひさし  
外園早大教授・藤木立教大名誉教授ら  
を招いて行われた古文書調査

## 仁叟寺通信 1

去る8月末に弟子・龍道の<sup>ほかぞのとよちか</sup>大  
学時代の恩師・外園豊基早稲田大学教育学部教授(日本中世史)が、仁叟寺古文書の調査に来寺されました。他にも、日本中世史学の大家でもある

藤木久志立教大学名誉教授も同行し、3日間に亘る調査を行いました。

仁叟寺古文書は町の史跡にも指定されており、今回は町文化財保護委員や教育委員会

やマスコミ関係者も来寺。調査を行った藤木教授は「これだけの貴重な史料が火災や戦災に遭わず残っていることは珍しい」と話していました。

この古文書調査をきっかけに、11月<sup>じんそうじしへんさんしつ</sup>に『仁叟寺史編纂室』が外園教授監修の下、立ち上がりました。寺の歴史はもちろんのこと、地域の歴史にも新しい1ページが開かれるのではないのでしょうか。今後の展開が期待されます。

## 龍源寺探索 - 1 -



龍源寺境内中庭にひっそりと佇む双体道祖神

当寺境内中庭に道祖神をはじめとする石像・石仏・石碑が集められた一角があります。今回はその中でも保存状態の良い双体道祖神の紹介をいたします。

この道祖神が作られたのは江戸時代。時代的には新しいが、非常に彫りが深く、彩色されているのが確認できるほど保存状態が良いのが特長です。また、夫婦で酒を飲んでいるところなどユーモラスな道祖神であります。

道祖神信仰の始めは民俗信仰が

起源とされています。奈良・平安期になり仏教が浸透してくると道祖神は地蔵や仏像を模したそれが作られ信仰されるようになったと言われてい

ます。双体の道祖神は比較的新しいと言われています。また、この道祖神は様々な信仰を含んでいます。道の神・旅の神・境を守る神・耳の神・子供の神…

当寺に参拝に来られた際には昔の先祖様やその時代の生活に思いを馳せ、道祖神様にお参りをしてみてくださいか。

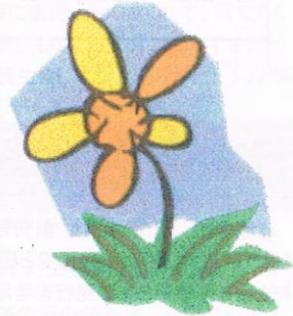
## 龍源寺生け花教室生徒募集

住職の妻・渡辺恵津子(華号・渡辺けいほう恵萩)が講師を務める生け花教室も今年で10年目を迎えました。恵萩先生は草月流師範の資格を持ち高崎華道会に在籍。現在、生徒は3人で、龍源寺・仁叟寺各教室にて指導に励んでおります。

時間は毎週火・水曜日の午後6時か

ら。入会金は無料で月謝は6,000円(教材花含む)。恵萩先生は、「中学生以上で花の好きな方でしたら是非参加して欲しい」と話しています。

また、琴の教室(現在休講中)も併せて参加者を随時、募集しています。詳細は、本紙最終面にある連絡先をご参照の上、お問い合わせ下さい。



### ばいこ

## 梅花講講員募集

住職の妻・渡辺恵津子が5年前より、吉井町小暮の全林寺において梅花(御詠歌)を習っております。この度、4級えいはん詠範の資格も取得し、龍源寺そして本寺・仁叟寺において梅花講の申請をいたしました。

梅花講とは御詠歌(御和讃)を鉦や鈴を使いゆったりとおごぞかに唱え上げる、いわばお寺の音楽隊です。

仁叟寺檀信徒会館にて月2~3回程の稽古で会費は月500円を予定しております。足の悪い方は椅子もございませ



御詠歌練習の様子

## 連絡はこちらまで

龍源寺  
〒370-2116  
群馬県多野郡吉井町多胡776  
TEL・FAX 027-387-5859  
E-Mail ryugenji@alpha.ocn.ne.jp

仁叟寺  
〒370-2123  
群馬県多野郡吉井町神保1295  
TEL 027-387-3080  
FAX 027-387-8766  
E-Mail jinsouji@dan.wind.ne.jp

住職が兼務という状況でございます、檀信徒の皆様にはご不便をお掛けしております。弟子の龍道も2年間の本山修行・立職・瑞世と終わり、今年中の龍源寺晋山式(住職就任式)に向けて、準備を進めているところでございます。檀信徒の皆様には今後のご協力宜しくお願い申し上げます。

さて、法要の申し込みですが左記の龍源寺または仁叟寺まで、お早めにご連絡をお願い申し上げます。

仁叟寺HPが遂に登場！！

是非、ご覧下さい。↓

<http://www7.wind.ne.jp/jinsouji/>

## 行雲流水 (編集後記)

龍源寺報『山雲水月』創刊号—いかがだったでしょう。これからも、菩提寺と檀信徒をつなぐ情報紙として各季節ごとの発行を考えております。なるべく細かくそして分かりやすい寺の状況報告を紙面に反映していこうと思っております。また、寺のことだけでなく仏事に関する儀礼なども漸次、掲載していこうと考えております。なお、部数に余裕がございますので、親戚・知人などの差し上げたいという方は、ご遠慮なく申し出てください。

さて、編集後記の副題「ぎょううんりゅうすい行雲流水」。有名な禅語ですが、「行雲」と「流水」を初めて使ったのは中国は宋代の大詩人・そしよく蘇軾だと言われております。蘇軾は別名蘇東坡そとうはと言われ、中華料理で有名な「東坡肉」の発明者としても知られています。この行雲流水、日本語に訳すと、「行く雲、流れる水のごとく」。「雲や水の流れ

祈念万福多幸 吉祥如意

編集人 副住職 渡辺龍道

のようにゆったりと自由に生きてはどうですか」と世知辛い世の中を渡っている現代の人々に、禅の精神を伝えているかのようです。

また、この「行雲流水」を略すと「雲水」。禅の修行僧を表す言葉になります。私も昨年うんすいの3月末までは大本山總持寺において2年間の修行生活。早いものでもうあれから1年が経とうとしています。修行時代の初心を忘れる事無く、これからも日々精進していく所存でございます。



曹洞宗大本山總持寺大祖堂